

防虫ネット開発で無農薬農家と協力

県内繊維業者と繊維工業試験場

元気のでるファームに提供し意見収集

改良し11年の市場投入へ

高性能防虫ネットの開発に取り組んでいるフジリース(桐生市相生町)、シロテックス(伊勢崎市連取町)、野口染色(桐生市新宿)と県繊維工業試験場(桐生市相生町)は14日、桐生市梅田町で有機無農薬野菜栽培を手掛けているNPO法人元気のでるファームに、開発中の防虫ネットを提供した。これまでもデータ収集として、県内外の農業技術センターや農家で実証実験を行ってきたが、無農薬栽培農家への提供は初。虫食い被害を受けやすい無農薬栽培の現場で防虫ネットを利用してもらい、使い勝手などに関する意見を収集し改良に役立てたい考えだ。

(夏井智之)

県内繊維業者、繊維工業試験場が開発に取り組んでいるのは、ネットの目を小さくすることで、

な虫の侵入を防ぎつつ、ポリエステル製の細い糸を使うことで通気性や透光性を確保した防虫ネット。11年までの商品化を目指している。

これまでの実験により、透光性や通気性など数値的なデータは取れているが、同試験場の恩田紘樹さんは「耐久性など実際の使い勝手を見た

無農薬栽培でハードルは高いと思う。どの程度使えるか、試してもらえれば」と考え、防虫ネット提供を提案した。

元気のでるファーム側も、「野菜の虫食いは無農薬の証として認知されてきているが、やはり少ない方がよい。ネット



有機無農薬野菜栽培の畑を見学する繊維業者ら

をかけられるなら全部の野菜にかけたいが、コストの問題がある」(北條太郎理事長)と、資材面で苦労していたこともあり、モニターとしての協力を快諾した。

提供したのはフジリースが担当する編物タイプ40と、シロテックスが担当する織物タイプ100だ。通気性、透光性は織物が勝るが、編物は伸縮性があるため強度面で優れるという特徴がある。ネットを手にした北條理事長は、目の小ささや軽さ、薄さなど、現在使用しているネットとの違いに驚いていた。

元気のでるファームで行われたネットの受け渡

しには、同試験場の恩田さんのほか、フジリースの中野隆雄社長、シロテックスの下城郁雄専務、野口染色の野口善朗社長も参加。無農薬栽培に加え、桐生市内での利用ということで、今後の緊密な意見交換にも期待を寄せた。参加者は全員で農地を見学したほか、ネットの開発状況や現場で求められるネットなどについて意見交換を行った。

中野社長は「ネットの必要性を聞くときやりがいいが出てくる。テストしていただき、ざっくりはらんに意見してもらいたい」と述べ、北條理事長は「ネットは本来に必要なもの。いろいろ試したい。地元との連携で地域活性化につながるれば」と語っている。

職員の顔が見える紹介パネル

県繊維工業試験場
研究成果を分かりやすく掲



県繊維工業試験場(桐生市相生町、布施久康場長)はこのほど、同試験場ロビーに研究者の専門分野や開発事例を写真入りで分かりやすく紹介したパネルの展示を開始した。また、28日に県民の日には同試験場の一般公開を実施。毎年行っている藍染めなどの体験コーナーに加え、職員紹介パネルに記載した

「試験場で何をやってどんな人がいる」といったことを見えるように「試験場」といって顔が見えるように紹介パネル制作を担

「商品券」再販売

新、新里・黒保根商工会

の売上増効果受け

ので、今年6月の発売に続いて今年2回目となる。

「きりゆう商品券」は1セット1万円、一般商店専用券が7000円分、店

